

暗唱聖句 「それゆえ、神は御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、かたくなにしたいと思う者をかたくなにされるのです。」 ローマ9：18

---

今週の聖句 ローマ9章

---

今週の研究：神には、特定の人々を選び、彼らを御自分の「選ばれた」者として用いる権利があることを、パウロは論証しようとしています。結局のところ、神は世界宣教に対する最終的な責任を負うお方です。したがって、神が思いのままに御自分の代表者を選んではいけない理由はどこにもありません。神がすべての人から救いの機会を奪うことにならない限り、神の側におけるそのような行為は自由意志の原則に反するものではありません。

---

日曜日：神は異教信仰、偶像崇拜に浸った世界に福音をつたえる宣教の民を必要としていました。そこで、神はイスラエルの人を選び、彼らに御自身を啓示されました。神の計画は、イスラエルの人模範の民となり、他の民を真の神に関心を持たせることにありました。神の目的は、イスラエルを通して神の品性が啓示されることによって、代が神に引き寄せられることでした。

パウロはここで、イスラエルに与えられた約束が完全に失敗したわけではないことを論証しようとしています。残りの者がなお存在し、神は彼らを通して働こうとしておられます。

世襲財産や祖先も、決して救いを保証するものではありません。正しい家系、正しい家族、あるいは正しい教会に属しながら、なお約束から除外され、滅びることもあります。だれが「約束に従って生まれる子供」であるかは（ローマ9：8）、つまり愛の実践をとまなう信仰によって明らかにされます。

---

火曜日：決定的に重要な点は、墮落した人間である私たちはこの世界について、現実について、神について、またこの世界における神の御業に関して非常に狭い見方しかできないということです。周りの自然界を眺めただけでも、理解できない神秘で満ちているというのに、どうしたら私たちに神のすべての道を理解することができるといのでしょうか。

神はわたしたちの見えない世界に関する無関心、無知に驚いておられるでしょう。ま

もなく私たちの無知の程度が明らかになる時が来るでしょう。

---

水曜日：パウロは、「わたしは深い悲しみがあり、私の心には絶え間ない痛みがあります」と言っています。(ローマ9：2)。彼の同胞の中に、福音の訴えを拒む者たちがいたからです。しかし、幸いにも、残りの者がいました。人間の約束とは違って、神の約束は失望に終わることがありません。最後には必ず実現します。ここに、私たちの希望があります。神の約束に信頼するなら、それは必ず実現します。

---

生命について考えるときに、わたしたちの命は自分で選ぶことができないことに気づかされます。わたしたちは生まれることを選んだのではありません。そして性別も性格や特性なども選んではないのです。なかには親から受け継いだものもあるでしょう。また生まれた環境も選ぶことができませんでした。

これらがたまたま偶然の積み重ねと考えることもできるでしょう。けれどもそうしたらわたしたちの存在の意味を見つけることができるでしょうか。

パウロは神さまの方からわたしたちに出会うために選んでくださったと今週の学びでは教えています。だとしたら、これはとても宝くじにあたるよりもはるかに幸運なことではないでしょうか。神さまは、すべての人を救おうとされている中で、わたしたちに先に声をかけてくださったのです。これはどんなに喜ばしいことでしょうか。

こどものころ、ダマスコ郊外でパウロにイエスさまが語られたように、直接神さまから声が聞こえないだろうかと思ったことがありました。

そこまではしてもらえなかったにせよ、わたしたちは神さまから光を与えられました。けれども大切なのは、その光にどう応答するかです。パウロは3日間、暗闇の中で自らの歩むをふりかえり、神の声をみことばを思い返しました。そして神さまの召しに応じて異邦人への使徒となったのです。

神さまから光を受けて→わたしたちはその光に応える→わたしたちが神さまのこどもとなる。ここで終わっていないでしょうか。神さまは、この喜びを伝える器となるように、わたしたちを救ってくださったのです。

昔もイスラエルの民を選ぶ祝福されることで、その力を与えている神さまの光が広まるように願っておられた神さまは、同じようにあなたが受けた光を照らすように願っています。

だからみことばから光を受けてください。そして祈りつつ、その光に応えてください。